日本古典集成

閑吟集　宗安小歌集

北川忠彦　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第五三回）

閑吟集（かんぎんしゅう） 宗安小歌集（そうあんこうたしゅう）

昭和五十七年九月五日　印刷
昭和五十七年九月十日　発行

校注者　北川忠彦（きたがわただひこ）

発行者　佐藤亮一

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　新宿加藤製本

定価一七〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tadahiko Kitagawa, Printed in Japan, 1982.

目次

凡例……三
閑吟集……九
宗安小歌集……一五九
解説　室町小歌の世界――俗と雅の交錯……二三七
付録
宗安小歌集原文……二七一
関係狂言歌謡一覧……二八一
参考地図……二八六
初句索引……二八九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡　例

〔閑吟集について〕

一、『閑吟集』の主要な伝本としては、宮内庁書陵部蔵図書寮本、阿波国文庫旧蔵本（志田延義氏現蔵）、水府明徳会彰考館蔵本があるが、これら三本は文字遣い、丁割り、行割り、見せ消ちに至るまで一致するところが多く、大局的にみれば同一系統本と考えられる。本書は図書寮本を底本としたが、適宜他の二本を参照し、かなり自由な立場で本文を制定した。

一、各歌の頭には通し番号を付し、本文には適当に漢字をあて、仮名遣いを正し、振り仮名・濁点を付し、また行分けを試み読点を加えるなど、本叢書の性質上出来るだけ読み易い本文を作製するよう心掛けた。したがって、校異については特に重要と思われる個所で触れるにとどめた。その場合「諸本」と記したのは右の三本に共通した表記のことである。

一、『閑吟集』の各歌には次のような肩書の略号が付されている。

小―小歌　大―大和猿楽（謡曲）　近―近江猿楽　田―田楽能　狂―狂言歌謡
放―放下歌　早―早歌（宴曲）　吟―吟詩句（漢詩）

本書では吾（底本肩書欠）公三（底本肩書「廊」）を阿波国文庫旧蔵本により「小」と訂したほか、底

本で肩書の欠落している三、四八、一二、一七、三七、二四、二八、三〇七の八首についても内容から推定して「小」「大」の肩書を（　）内に記しておいた。

一、諸本とも本文には相当数の振り仮名が付されているが、これは本文より筆写年代が降ると思われるので、参考にするにとどめた。また底本の仮名をそのまま振り仮名として残したところも多い。「和御料」「和御料」といった不統一が生じているのはそのためである。「候」（そろ・ぞろ）「何」（なに・なん）「〳〵」の繰り返し部分等については、当時の音韻事情、謡曲や狂言歌謡における伝承等を勘案しながら校訂者の判断によって読みを定めた。

一、頭注欄は「口語訳」「釈注」「語釈」から成る。「口語訳」は内容を理解する一助として試みたもの、「釈注」は鑑賞のための校注者の心覚えと理解していただきたい。

一、頭注欄における引用も読み易いように表記を改めた。また引用した歌謡・民謡は、出来るだけ日本歌謡集成（正・続）、日本庶民文化史料集成・五『歌謡』、近世文芸叢書・十一『俚謡』、日本古典全集『歌謡集』等の叢書類に収載されているものから選ぶよう配慮した。

一、『閑吟集』三百十一首の配列は、あるいは主題、あるいは語句の連鎖・連想によっており、また全体は春・夏・秋・冬・恋の部立てをみせている。本書ではその主要な連鎖語を「見出し」として本文の中に立て、そのほかのものは下段に抜き出すなどしてその配列の妙を示すことにした。

〔宗安小歌集について〕

一、『宗安小歌集』は現在原本の所在が明らかでないので、笹野堅氏編『室町時代小歌集』（萬葉閣版、

昭六）に収められた玻璃版によった。校訂方針等は『閑吟集』に準ずる。

一、『宗安小歌集』の小歌は隆達節歌謡と共通するものが多いが、頭注欄でそれに触れる場合、

人の情のありし時、など独り寝を習はざるらう（『宗安小歌集』三四）

人の情のありし時、など独り寝を習はざるらむ（隆達節草歌・恋）

愛しさがの、積り来て、更に寝られぬ（『宗安小歌集』七）

いとほしさが積り来て、更に寝られぬ（隆達節小歌）

という程度の違いは「同歌」とみなしてある。

一、なお本書一四三番の歌は、従来「名さい渋張りの籠」で切って読み、二首と数えられていたものである。したがってこれ以後は通し番号が従来公刊されたものと比べて一番ずつずれているので留意ありたい。

〔その他〕

一、付録として、宗安小歌集（原文）、関係狂言歌謡一覧、参考地図、初句索引を添えた。地図については足利健亮氏の御教示を得た。

一、本書をまとめるについては、『閑吟集』図書寮本の撮影並びに翻刻許可についてお世話になった八嶌正治氏、御架蔵の阿波国文庫旧蔵本の撮影をお許し下さった志田延義氏、彰考館本の写真を提供して下さった真鍋昌弘氏、その他著書・論文等を通じて数え切れないほどの方々の学恩を受けている。また天理大学、京都女子大学、奈良女子大学で『閑吟集』を教材としてとり上げた際、受講

された学生諸君の意見をとり入れさせて貰った個所も少なくない。本書はこれら多くの方々の好意に支えられて成ったものであることを明記し、感謝の意を表したい。

閑吟集　宗安小歌集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

閑吟集

＊真名序では、終始政道・人道と歌謡とを結び付けようとする姿勢がみられる。『春秋左氏伝』『詩経』（大序）『礼記』（楽記）等によるところも多い。

一 詠歌。歌謡のこと。

二 天と地。

三 硬いもの軟らかいもの。万物を生成する二元とされている。『易経』にみえる思想。

四 聖君賢王が、徳を修め世を治めるための最も重要な手だて。それが謳歌の道で、その中の音声の調和こそ政の調和のもとだ、ということを説く。

五 堯・舜・禹ら、中国古代の聖主たち。以下『春秋左氏伝』（昭公二十年十二月条）による。

六 東洋音楽の音階。宮・商・角・徴・羽。この五音をそれぞれ君・臣・民・事・物に当て、政道に通じさせようとする思想は『礼記』（楽記）にみえる。

七 以下「八風」まで音律や楽音の種類。種々の音声や楽器が互いに調和を保ってよい音楽となる、の意。

八 いろいろな発声、律調。「清濁」「小大」は音声の、「短長」「疾徐」は律調の種類。

九 すぐれた人の言葉や奏楽は、欠けるところなくまことにりっぱである、の意。「徳音」は徳ある人の言や音楽。「溺音」に対する。『詩経』（狼跋）によっているが、『礼記』（楽記）にも「正二六律一和二五声一弦二歌詩頌一、此之謂二徳音一。徳音之謂レ楽」とある。

真名序

閑喩集

夫れ謳歌の道たる、乾坤定まり剛柔成りしより以降、聖君の至徳、賢王の要道なり。これを異域に温ぬるに、其の来たること久し。先王の五声を和するや、以て其の心を平らかにし、其の政を成すなり。五声・六律・七音・八風、以て相成すなり。清濁・小大、短長・疾徐、以て相済すなり。君子はこれを聴き、以て其の心を平らかにす。心平らかなれば徳和す。故に詩に曰く、徳音瑕けず、と。

（一）歌謡の道は
（二）三万物が生成してから
（四）その例を中国に
（五）源流は甚だ古い
（六）音声の調和を図ったのも
（七）世の人の心を和やかにし
施政者
（八）それを治世の基とするためで
（九）心が和やかなら自然と徳も備わる

夫謳歌之為レ道、自二乾坤定剛柔成一以降、聖君之至徳、賢王之要道也。温二之異域一、其来久矣。先王和二五声一也、以平二其心一、成二其政一也。五声六律七音八風、以相成也。清濁小大短長疾徐、以相済也。君子聴レ之、以平二其心一。々平徳和。故詩曰、徳音不レ瑕。

一 心に激して吟ずること。思うところを詩句として口ずさみ、なお興に乗ればそれに曲節を付して歌うようになる、の意。以下『詩経』（大序）や『礼記』（楽記）によるところが多い。

二 平和な時世のうたは楽しい。なぜなら政治と民心が揃って安定しているからである。

三 政治が民心と背反しているからである。

四 志（感情）が発露して詩となり、それに曲節が付されて謡となるという三者の関係を説く。

五 「三代」とは中国古代、夏・殷・周の時代。したがって「三代以前」とは太古、堯・舜の時代のこと。

六 祭祀（公）のうたと民間（私）のうた。

七 堯の御代に、平和を喜んで一老人が歌ったいわゆる撃壤歌の一節。『論衡』（感虚）、『楽府詩集』（八十三）等に出る。参考「撃壤仁」「撃壤民」（『懐風藻』）。

八 始皇帝暗殺を図って秦に赴こうとする荊軻が、易水のほとりで「祖」（道祖神）を祭った後「風蕭蕭兮易水寒」と吟じた故事。『史記』（刺客列伝）に出る。

九 漢の高祖が故郷沛で「大風起兮雲飛揚」という詩を作り、児童二十人に合唱させ、高祖自らも立って舞った故事。『史記』（高祖本紀）に出る。

一〇 白い練絹を着し白馬を捧げるなどして寿を祈った折にこうした詩が生れたのだ。注七～九は「宗廟」の歌の例として挙げたか。

一一 狂接輿が孔子を鳳にたとえて諷した歌。『論語』

歌謡のこころ

これを嗟嘆（思い）して足らざれば、これを詠歌（うたとしてはげさむ）す。これを詠歌して足らざれば、手の舞ひ足の踏むを知らざるなり。治世の音は安んじて以て楽しむ、その政和すればなり。乱世の音は怨みて以て怒る、その政乖けばなり。得失を正し、天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩より近きはなし。

（手も足も自然と動き出し舞い踊るようになる）

（政道の）

（手段としてうた以上のものはない）

嗟嘆之不足、詠歌之。詠歌之不足、不知手之舞足之踏之也。

治世之音安以楽、其政和。乱世之音怨以怒、其政乖。正得失、動天地、感鬼神、莫近於詩。

詩は志の之く所なり。詩変じて謡となり謳歌せらる。尤も三代以前は物として宗廟侶隣の詠ならざるはなし。「井を鑿ちて飲み、田を耕して食ふ」とは堯の時の歌なり。易水の秦に於ける、大風の漢に於ける、一句の歌あるは、素練白馬、寿ぎて是を成すを得しなり。接輿は鳳兮を歌ひ、睿戚は牛角を扣つ。楚王の萍実、陳主の後庭花、僉民間に言はざるはなし。易に曰く、缶を鼓して歌ふと。豈

（古代における歌謡といえばうたがすべてであった）

（「大事の時に」）

（微子）等に出る。
一二 甯戚が牛の角を叩いて歌ったことにより斉の桓公に見出された故事。『蒙求』（中）に出る。参考「甯戚は牛口の匹夫たりながら、つひに国の政に臨む」（『十訓抄』三）。
一三 楚の昭王が川を渡る時浮草の実を得、孔子が童謡によってその意味を解いたという故事。『孔子家語』（致思）、『説苑』（弁物）に出る。
一四 正しくは玉樹後庭花。陳の後主叔宝の作った楽の名。『教訓抄』（三）に『隋書礼楽志』を引いて「倚艶相高極二於軽薄一、男女唱和、真音甚哀」とある。
一五 注一一～一四を「侶隣」の歌と考　我が国のうた
えているのであろうか。
一六 「缶」は酒の容器。それを鼓の代りに用いたのである。『易経』（離）に出る。
一七 伊勢の国のこと。伊勢神宮の外宮背後の高倉山にある洞穴を、天照大神の隠れた天の岩戸とする伝承によったものか。参考「伊勢の国天の岩戸を押しひらき、花や神楽を舞ひや遊ぶら」（「三河花祭歌謡」）。
一八 天照大神が岩戸の隙間から顔を覗かせたところを手力男命が扉を裂き開いて天地は再び明るくなった。
一九 「地祇」とは国つ神のことだが、ここは人の世となって、というほどの意。以下古代の神楽歌から室町時代の謡曲に至る歌謡の変遷を説く。
二〇 宮廷貴紳の公の宴会の場で奏するにもふさわしく、それでいて庶民の心をも慰める歌曲といえば。

至徳要道に非ざらんや。（中国の例は）異方斯くの如し。

々者志之所レ之也。詩変成レ謡謳歌。尤三代以前、無レ不二物宗廟侶隣詠一。鑿レ井而飲、耕レ田而食、堯時之歌也。易水之於レ秦、大風之於レ漢、有二一句之歌一、素練白馬、寿得レ成レ是也。接輿歌二鳳兮一、甯戚扣二牛角一。楚王萍実、陳主後庭花、僉無レ不レ言二民間一也。易曰、鼓レ缶歌也。豈非二至徳要道一乎。異方如レ斯矣。

熟ら本邦の昔を思ふに、伊陽の岩戸にして七昼夜の曲を歌ひ、大神罅隙に面し、神の戸擘開して霄壌明白なり。地祇の始め已に神歌あり。次いで催馬楽興るなり。催馬楽再び変じて早歌となる。その間、今様・朗詠の類数曲あり。三たび変じて近江・大和等の音曲あり。或いは徐々として精を困しめ、或いは急々として耳に喧し。公宴に奏し下情を慰むるものは、それ唯小歌のみか。

（一七）岩戸の前で神々が七日七夜の神楽を奏し（一八）
（一九）〔鎌倉時代に至り〕
（二〇）急調で余りに騒々しい
（二一）

熟思二本邦昔一、伊陽岩戸而歌二七昼夜曲一、大神面二于罅隙一、神戸擘開而霄壌明白也。地祇之始已有二神歌一。次催馬楽興也。催馬楽再変而成二早

一『易経』（乾）の「雲行雨施」によったものか。
二 さらさらと。水の流れる音の形容。
三 ひらひらと。木の葉の淋しく散る音の形容。
四「唸」は「吟」に同じ。龍が吟じ虎が嘯く声も、また鶴や鳳の鳴声も。
五 大蔵経（一切経）五千　自然のうた、人間のうた　四十八巻を指す。これこそは釈尊の謳い上げ給うた仏道賛美歌である、というのである。
六 釈迦文仏（釈迦牟尼）の略。諸本「迦人」。彰考館本に「文歟」と傍記するにより改める。乱曲「西国下」に「釈迦一代の蔵経五千余巻」とある。このあたりは小歌こそ政道・仏道・人道の教えの神髄とみる、いわば「小歌至上主義」によっている。
七 三皇五帝の道を説いたとされる架空の書。
八 風俗を良化し、夫婦の間を円満にし、長上を敬うことを教え、人道を示すのが、これらの小歌である。『詩経』（大序）の「先王以レ是経二夫婦一、成二孝敬一、厚二人倫一、美二教化一、移二風俗一」による。
九 天竺（インド）支那（中国）扶桑（日本）と、国や人はいろいろであっても。
一〇「説」は「悦」に同じ。楽しい心を発散させ、歓を尽くすためである。
一一 宮廷においても武家においても、酒宴の席では朗詠や早歌のみならず、盃を傾けつつ静かに小歌を口ずさむことも多い、の意。「中殿」は清涼殿、「大樹」は将軍のこと、以下「浅斟低唱」という語を分割し、

歌一。其間有二今様朗詠之類数曲一。三変而有二近江大和等音曲一。或徐々而困レ精、或急々喧レ耳。奏二公宴一慰二下情一者、夫唯小歌乎。

小歌の作りたる、独り人の物に匪ざるや明らけし。風行き雨施すは、天地の小歌なり。流水の淙々たる、落葉の索々たる、万物の小歌なり。しかのみならず、龍唸虎嘯、鶴唳鳳声、春にして鶯あり、秋にして蛬あり、禽獣・昆虫の歌も、自然の小歌なるものか。而るを況んや人情をや。五千余軸は迦文の小歌なり。五典三墳は先王の小歌なり。風を移し俗を易へ、夫婦を経め、孝敬を成し、人倫を厚うす。吁、小歌の義たるや大なるかな。

小歌之作、匪二独人物一也明矣。風行雨施、天地之小歌也。流水之淙々、落葉之索々、万物之小歌也。加之、龍唸虎嘯、鶴唳鳳声、春而有レ鶯、秋而有レ蛬、禽獣昆虫歌、自然之小歌者耶。而況人情乎。五千余軸迦文之小歌也。五典三墳先王之小歌也。移レ風易レ俗、経二夫婦一、成二孝敬一、厚二人倫一。吁、小歌之義大矣哉。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com